

沖縄の石造遺構における周辺諸国の影響

THE OLD MASONWORKS ON OKINAWA ISLANDS AND THE INFLUENCES THEREON FROM SURROUNDING COUNTRIES

上間 清*

By Kiyoshi UYEMA

This paper discusses the foreign influences on masonry structures on Okinawa Islands, of which the author finds importance from the view point of the history of civil engineering of Japan. With the experience of maintaining a kingdom until early part of nineteenth century, the islands have rather different characteristics than the other part of Japan in the culture and history that largely show the influences of China, South East Asian countries and Korea during for about 100 years beginning from the middle of fifteen century.

Recognizing the background, the author is to consider the structures of "Gushiku", a name given to the space and structures encircled by stone walls, and old masonry bridges along with the influences on them.

1. ま え が き

昭和47年以来、沖縄に対する全般的な学術的関心の高揚と相まって、建築学、土木工学の側からも集落、文化史、亜熱帯の自然環境における環境問題、材料学上の問題など種々取り組まれるようになってきた。沖縄が広範な関心を集めている理由は、その地理的位置を前提とした自然条件と、わが国の他の地域とはおもむきを異にした歴史的展開過程から生みだされた文化全般（沖縄文化と通称）のもつ特性のゆえである。

Table 1 はこれまでの沖縄研究の経緯を4期に分け整理を試みたものである。各期を代表すると思われる主要なものを含めた。

本稿は、文化遺産として重要な地位を占める石造構造物を対象に、これらに対する海外の影響を考察するものである。沖縄の石造構造物は規模としては特筆されるものは少ないが、その内容には地域土木史の観点ばかりでなく、わが国土土木史の観点からも重要な内容を含むものであると筆者は考えている。

これまで、沖縄の石造構造物については、文化史（民族・考古）の側から仲松¹⁾、嵩元²⁾、友寄³⁾らが、また建

設史の側からは著者の若干の考察^{4)~8)}、又吉⁹⁾、小川¹⁰⁾、山口¹¹⁾、大田¹²⁾らの調査研究や論考などがある。前3者はいわゆるグシク論争の展開の過程で役割を担った研究者であり、後者は石造構造物の史的意義、解釈、構造的特徴、またグシクに関する都市核としての考察などである。

これらによって、沖縄の石造構造物のもつ一般特性については理解がなされていると考えられるが、沖縄文化全般の特徴である、中国・南方諸国・朝鮮などを主体とする海外の影響の視点から考察する研究はこれまで行われていない。この点は、これら石造構造物の土木史的意義を考察する際重要な事項であり、ここに小論を試みるゆえである。

2. 沖縄文化全般における影響の状況

石造遺蹟は研究の対象として、すぐれて学際的存在である。沖縄の場合も例外でなく、それらは建設史の側からはもちろんのこと、民俗学、考古学、歴史学、宗教とのかかわりが深く、今日に至るまで高い関心が示されてきている。

さて、文化遺産としての石造構造物を考えるにあたり、その前提として沖縄文化についての概念を提示しておきたい。これについてはまだ論議の余地もありいまだ定着

* 正会員 琉球大学教授 工学部土木工学科
(〒903-01 西原町字千原道田59)

Table 1 Review of representative literatures of Okinawa-Study.

期 間	調査研究の特徴	主なる研究者及び文献
第 I 期 (明治30年代頃 以前)	明治以前の時代から明治30年頃までをまとめて第 I 期としたが、この期間の中には、古代中世における中国、わが国の古記録、琉球王朝時代の落文献、さらに廃藩後の琉球統治時代官公調査関連の諸調査研究等が含まれる。 まだ史学として冲縄研究は十分確立されていない時期と考えられよう。	<ul style="list-style-type: none"> 琉球王府編纂のもの — 「おもろさうし」(1953~1623)、「中山世鑑」(1650、羽地朝秀)、「遊船驗表」(1711)、「琉球因由來記」(1713、仲里孫朝朝美ら)、「中山世譜」(1725、祭産)、「琉球園田記」(1731)、「球蘭」(1745~1870、鄭重軒ら) 冊封使の記録 — 「琉球後編」(1534、陳◎)、「中山伝信録」(1719、徐应光)、「琉球国史略」(1756、周煌)等 廃藩置県後の官公調査：「琉球藩雜記」(1873、大蔵省)、「琉球処分提綱」(内務省、1879)、「琉球処分」(松田直之、1879)、「冲縄土地整理紀要」(1903)等 その他：「琉球華史」(1874、小林彦敬)、「琉球事件」(1880、松井慎等)、「南島沿革史論」(1960、藤原坦)、「琉球の研究」(1907、加藤三吾) 注：王朝以前の中国、わが国、朝鮮における文献省略。
第 II 期 (明治30年代頃 ~大正後期頃)	明治30年代中葉から大正期にかけての期間、伊波普猷らによって代表されるように冲縄研究がその独自性を世に問い、諸学会の関心を高揚し、冲縄研究の学問的基盤が築かれた時期といえよう。研究者は全ゆる分野に総体的に取り組んでいた。	<ul style="list-style-type: none"> 「琉球史の管見」(1901、伊波普猷)、「藤山氏の琉球語のことに ついて」(1904、島居龍藏)、「大日本地誌叢書琉球編」(1909、東恩納寛博)、「古琉球」(1911、伊波普猷)、「冲縄1千年史」(筑境安興・島倉蘭治、1923)、「風土記の琉球史」(1926、伊波普猷)等
第 III 期 (大正後期~ 昭和20年代)	第 II 期の基盤の上に更に学問的意義が注がれ、調査研究が進展され、学問的分化も、民俗学をはじめとして行われ、深化されていった。大正期後半頃から昭和20年頃までの時期。	<ul style="list-style-type: none"> 「冲縄県国語志」(1919、島袋一郎)、「柳田国男来冲」(海南小記)発表(1921、東京朝日)、「柳田国男訪島談話会」(1922)、「海南小記」刊行(1925、柳田国男)、「宮古史伝」(鹿田村恒住、1927)、「冲縄現代史」(1937、真境安興)、「ををり無の島」(1938、伊波普猷)、「中世南方通交貿易史の研究」(1939、小笠田洋)、「琉球史料叢書」(1940、東恩納・横山ら)、「久米島史料」(1940、仲原善忠)、「黎明期の海外交通史」(1941、東恩納寛博)、「冲縄海洋発展史」(1942、安里延)
第 IV 期 (昭和20年代 以来今日)	大戦後、今日までの期間を総称するが、従来の研究の潮流の中にあるが一層科学的態度で対応され、批判精神を一層尖鋭にして、研究の分化と深化、さらに一方で総合化も試みられている時期ともいえよう。 組織的・研究も盛んな時代。	<ul style="list-style-type: none"> 組織的に行われた調査研究：全米学術会議・太平洋科学調査部委託冲縄調査(1946)、早稲田大学学術調査団・八重山調査(成果「冲縄八重山」1960)、東京都立大学南西諸島研究委員・冲縄調査(1961)、東京大学東洋文化研究所冲縄調査団「冲縄文化と大陸文化との交渉に関する調査」(1966)、その他大阪市立大、東京教育大、成城大学、九学会連合、法政大学等が調査を実施している。単人著書も歴史、文学、地理、民俗等各学問分野での成果も刊行されると共に、総合化の試みも辞典、集成等の書名で、また県による風土編纂等で行なわれている。また、復刻書の発行、新聞集成、写真集の発行も盛んである。

したものがあるわけではなく、あくまで著者の理解であることを断っておきたい。冲縄文化とは、「琉球弧の南半、琉球方言の及ぶ南西諸島にあって古代から中世に至る(9~17世紀)過程で、周辺諸国(中国、日本、朝鮮、南方諸国)から継続的にあるいは間欠的に受容した文化インパクトとプロトカルチャーとの融合の過程から独自性を生みだし、ほぼ琉球王朝第二尚氏王統の前半頃までに、その様式や属性が定着したわが国一地方の文化要素の総体」のことである。

さて、冲縄文化への影響という場合、文化の内容をどうとらえるかが問題となるが、ここでは調査の及んだ、かつ石造構造物との影響関係もあろうと考えられる絵画、彫刻、工芸一般、漆器、織物、陶業、紅型、金工について海外の影響の程度を整理しておく(Table 2)。

これらの海外の影響についての文献としては、中国から琉球への使者、すなわち冊封使らによる使録や、琉球王朝の行政記録であった「球陽」、その他「おもろ」「季朝実録」、古瓦や古橋梁建設に付随する銘文や碑文などがあり、これらが文献群を構成している。しかし、関連

記述は一般にきわめて断片的であって明快な記述のあるものは少ない。表に要約した程度であると考えると差し支えない。Fig. 1は琉球王国時代の海外交流国の分布を示す。

Table 2からも知られるように、各分野における海外の影響の状況は、琉球弧の要の位置という地理的特性を反映して、多様であり、全般的に複合的であることがわかる。交流国の対流影響の程度は、明確に指摘することは困難であるが、序列としては、交流期間の長短から判断するとき、中国、南方諸国、朝鮮と解されよう。しかしながら、中国についてはその長い政治的交流(14世紀~19世紀)を反映して当然のことと考えられるが、朝鮮については、歴史の伝える交流頻度の少なさ(来船・遣船約30回)に対して影響の範囲が比較的広範であることが知られ、文化的影響というものが、必ずしも交流期間の長短のみで決定づけられるものでもないことがうかがえる。

さて年代に着目すると、15世紀中葉から16世紀中葉の約100年間で、影響濃度がこい。この期間は冲縄史に

Table 2 Oversea impacts in various fields of culture.

分野	状 況	証 拠	年 代	備 考
絵 画	二つの流れがあると考えられている。「第一に中国系、即ち宋、元、明の影響」いま一つは鎌倉、室町、桃山、江戸の流れである。	① 円覚寺の壁面「金剛会図」 冊封使陳氏使録、同寺の上院文 ② 尚真王以来の御後絵（肖像画）の存在	① 尚真15年（1492）頃 ② 明らかではないが、尚真の頃からこれらの絵画技法がかなりのレベルにあったであろう。	① 現存せず ② 作者、明らかでない、表現、現方法に聖徳太子像に相通するものがあるという。 17C以降、中国や日本に留学著、従来の宗教画に加えて鑑賞画も盛んとなり近代絵画導入。
彫 刻	初期の頃は中国の影響か。「ともあれ沖縄の文化は一言にしていえば種々の『様式』をとり入れて独自に消化し拘束たる筆を咲かせたといえよう」	石獅子（首里城瑞泉門、歓会門、實法殿）、竜柱（首里城正殿前）、勾欄羽目の浮彫（世持橋、観海橋、放生橋）、放生橋々柱の記録（張龍、陳義）	尚真王時代（1477-1526）その黄金時代を迎えた。	建築と併せてこれらの彫刻と石造構造物の特徴が伊東忠太や田辺泰らの住年の建築家の「中国気分」と称した中国風の印象を与えたものと思われる。
工 芸 一 般	沖縄の工芸は海外貿易を基礎にして発展をとり、風土と環境が独自のものをつくりあげた。中国陶磁器のものが「大らかさ」「麗揚さ」が影響を与えた。南方系、中国系、朝鮮系、大和系に区分される。これらの影響をうけ総体として多様である。	南方系→南蛮焼、読谷山花織、芭蕉布、絣 中国系→龍織、虹型、ラデン、堆錦 朝鮮系→瓦、施軸マカイ、把瓶花生 大和系→印籠、重箱	尚真王時代前後に多くの分野で工芸盛ん。 1609年以降、自らの生産体制をつくりあげ、王府の統制、指導のもと発展してきた。	沖縄工芸の特色は「たくましさ」「素朴さ」「おらかなさ」にある。
漆 器	14～5Cまでの漆芸は室町時代以来、中国から学び、日本の技法を学んだと思われる。後、海外から学びつつ、独自の発展をげた。	① 1372年、中国と国交開始した際の貢品の中に「螺殼」がみえるという一最古の記録 ② 「球羅」（巻二）の記録から1427年頃、夜光貝の使用、日本から漆をとりよせていた。 ③ 「季朝実録」に1473年頃、漆器の利用の記録。	明確ではないが、15C後半頃までには、かなりの技術があり、陶器の利用も普及。	1612年、貝摺奉行所設置後は、技術者を海外（中国、日本）へ派遣し技術を習得させ発展した。代表的技法に「螺貝」「地輪」などがある。
織 物	古代は日本の影響か。初期は大和系、絹織物が多い。絣は南方貿易以降と考えられている。	1477年与那国の織物の記録（茶朝実録） 絣、花織物→南方系 浮織→ろう織、紗織→中国系	明確な年代は全般的には不明 1500年頃胡織物技術導入	絣については、わが国の絣の源流をなすという。 沖縄→鹿摩→久留米→中国地方→東北地方へ伝わる。
陶 業	朝鮮（高麗）、安南シャム の陶法の導入、タイのラオロン器から泡盛の製法を学び、その容器としてアワモリ容器を製作。	① 浦添、勝連の各城からの高麗瓦の発見、沖縄で焼成されたと推定される。 ② アワモリ容器、水ガメ ③ 「球羅」及「琉球国日記」巻四の記録、瓦葺殊職などのこと。 ④ 1617年頃「一六」「一言」「三官」なるもの茶碗。朝鮮式陶法導入し、陶業に「革命」もたらす一琉球国日記巻四。 ⑤ 1588年、中国帰化人、渡嘉敷三郎、真玉橋に陶窯設置一「琉球日記」巻四。	① 年代特定は不明、15Cよりかなりごく前か。 ② 15～16C頃。	瓦の窯跡は不明。沖縄古京に喜納焼、湧田焼、知花焼、古我知焼、湧田焼、宝口焼などがある。 初期の陶物は南方系。朝鮮式陶法は後代まで沖縄陶法の根幹をなした。
紅 型	紅型の起源は不明。南方系の染色法を模して、日本（室町時代の辻が花の表現法、後友禅）、中国（「糊引」の技法など）から技法を学び独自の発展したと考えられている。	「おもろ」の記録-「観ぎぬ」は紅型か。	南方系ということになれば、15C-16Cの南方交易時代の初期頃か。	
金 工	梵鐘、通寶（通宝）などが主なものであるが主要梵鐘の多くは、日本で製作されたようである。金工技術は主として日本から導入と考えられよう。沖縄で製作されたものは小規模のものであるらしい。	首里梵鐘-1458年、重さ600kg 円覚寺大鐘-1697年、重さ3000kg、その他中小のものがあり、現存するものもある。	尚泰久王（1454-61）の時代から大世通宝や梵鐘が製作されたという。梵鐘の殆んどは尚泰久王、尚徳王の時代（1454-1469）に製作されている。	梵鐘の铸造は神社（琉球八社）の建造と時を同じくしている。

いう、琉球王統第二尚氏（1470～1879）の前期約100年間に相当している。この期は、群雄割拠の時代（いわゆる三山時代）が終焉を迎え、その後政治的統一が実現し安定期に達した時代である。新しい時代の雰囲気のもとに、海外文化を鋭意吸収し、その後につづくプロトカルチャーとの融合過程の基礎を形成した期であるという評価も可能であろう。Fig. 2は沖縄文化形成における影響パターンを試みに示したものである。

3. 石造構造物などへの影響

さて、沖縄文化と称されるもののうち、土木史関連の対象についてはどうであろうか。以下には石造構造物遺跡

の中心をなすグシク（一般に城と理解されるが、正確な表現ではなく、1つの側面と考えるのが正しい）と古橋梁（石造橋）について述べる。

(1) グシクと論争

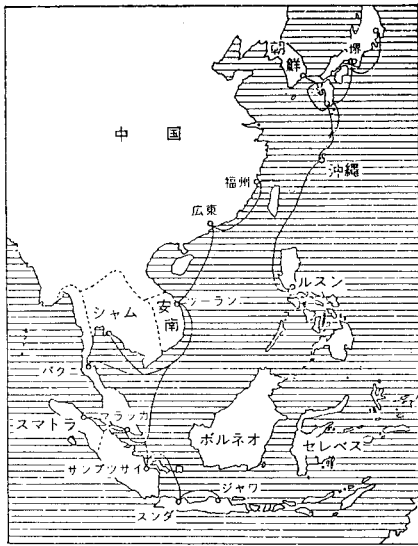
グシクと称される石垣囲いの構造物の特徴については、別途発表してあり¹⁴⁾、その学問的定義がまだ明確になっていないこと、その規模、分布が広範に及んでいることも指摘した。また、グシクの特性についての論争として看過できない、いわゆる「グシク論争」について、「集落説」「聖域説」「統一説」があり、その展開モデル（「高良モデル」「友寄モデル」「小川モデル」）についても述べた。ここでは既発表の若干の補足と著者のモデルを提示したい。

前二者のモデルを提案したのは、高良倉吉、友寄英一郎であるが、前者が歴史学、後者が考古学の研究者であり、両者は、それまでのグシク論の中心であった「聖域説」「集落説」について視点を変えて、その多様化の必要性和、時代の進展過程におけるグシクの特性の変化の存在を前提として、統一的に解釈を試みたものである^{31,15)}。両者の相違点は、モデルの出発点において高良が集落としたのに対し、友寄が今日不明の原初的存在を考えている点であるといえよう。「小川モデル」は、土木の側からのグシク論として特筆されよう小川の論考¹⁰⁾の解釈から、著者が試みに作成したものである。Fig. 3のようなモデルである。小川はその論考で「聖域説」の仲松の主張に賛意を述べていることから、グシクの原型としては神聖な場所としてのある空間を考えていると解されよう。

Fig. 4は、Table 3に示した著者のグシクシナリオに基づいて、モデルを提案したものである。従来このような明確な形で時代の進展とグシク構造物の出現進展を解釈したシナリオはなかったと考えている。このシナリオの作成にあたっては、手法としてはシナリオライティングを用い¹⁶⁾、沖縄歴史の進展と人々の生活と石造構造物の自然な対応関係に意を用いた。この観点から著者としてはグシクの出現過程に無理のない解釈が可能になったと考えてはいるが、学際の対象としてのグシクについては今後も新しい知見が生まれようし、もちろん今後の検討の余地も残しているといわねばならない。

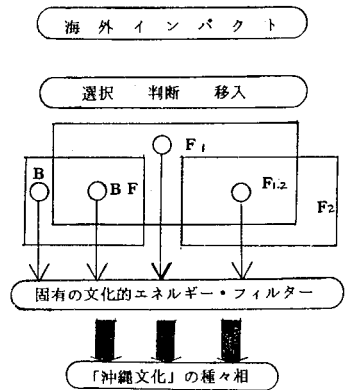
Fig. 4とTable 3は時代の進展に応じて、対応するように作成してある。すなわち図表の対応で、①～Ⅰ、②～Ⅱ、③～Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、それに④、⑤～Ⅵである。

海外の影響については大別して2期を考えている。すなわち、図のF₁、F₂である。著者の見解では、集落としてのグシク建設が進展し、小王国が出現し対立した時代（三山時代）を背景とした前者（F₁）がより大きかったと考えられ、城としてのグシクの形式や建設技術が、ほぼ定着したものと考えている。その理由は、この期に



(南方との交流 15C初頭～16C中期)

Fig. 1 The "impact" countries and sea routes¹³⁾.



B : BASIC 固有文化核
 F : Foreign impact 海外インパクト
 F₁ : Main 主影響 F₂ : Minor 従的影響

B F : B + F 混合または融合

Fig. 2 Overseas impact pattern.

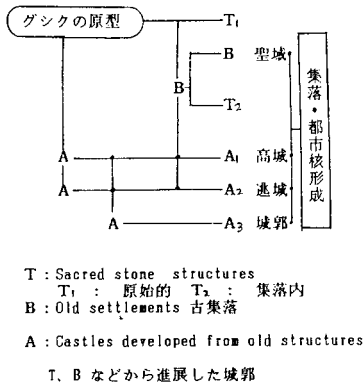


Fig. 3 Ogawa's Model.

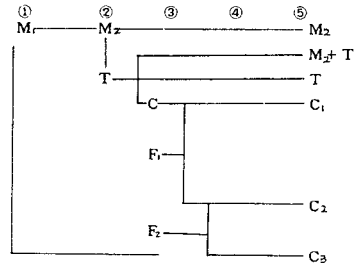
出現している今帰仁城（北山城），安慶名城，座喜味城にみられるように，グシクとして共通した構造的特徴——全体縄張にみる曲線の利用，局所の凸凹曲線の利用，拜所の存在，城門にみる拱の利用など——がほぼ出揃っている状況がみられるからである（Fig. 7 参照）。後者の第2段階の影響はどちらかといえば，中城城の三の丸や百里城におけるように，石積みや城門におけるより繊細な構造の面にその重きがみられる。

（2）グシクにおける海外の影響

グシクについては先にグシクのモデルを示したが，いつの時点からグシク構造に海外の影響があったかについては文献的には明確なものがない。しかし既述の沖縄文化全般への状況から判断するとき，やはり15世紀中葉からの100年間を考えるのが自然で妥当性があると思われる。しかし，グシクも含め石造建造物のなかには，15世紀初期にすでにその後の事例と比較しても劣らない技術レベルを維持しているものがあり（例：北山城，座喜味城，中城城，天女橋），しかも技術導入とその独自化の間には，他の工芸などに比較してより長い期間が必要と考えられるので，かなり早い時期に影響があったことも考えられる（Fig. 5, 6にグシクの分布，および主なるグシクの平面形状を示した）。

さて，グシクにおける海外の影響について論ずるにはまず中城城（遺構現存，沖縄本島中城村在）について考察せねばならない。その理由は，

当グシクが海外の影響という点で従来最も多くの研究者から指摘を受けた対象であること^{17)~20)}，かつこれまで



- F : Foreign influences 海外の影響
 F₁ : 三山抗争時代における影響(13c~15c)
 F₂ : 王国統一後の影響(15c~)
 M : Masonry Structures 石造建造物
 M₁ : 原始的 M₂ : M₁の発展形態
 T : Tombs outside/or inside old settlements
 古集落外部または内部の聖所
 C : Castle-like structures developed from M OR T
 M またはT から発展した城郭の構造物
 C₁ : 小規模 C₂ : 中・大規模 C₃ : 特殊機能的

Fig. 4 "Gushku" Model (by the author).

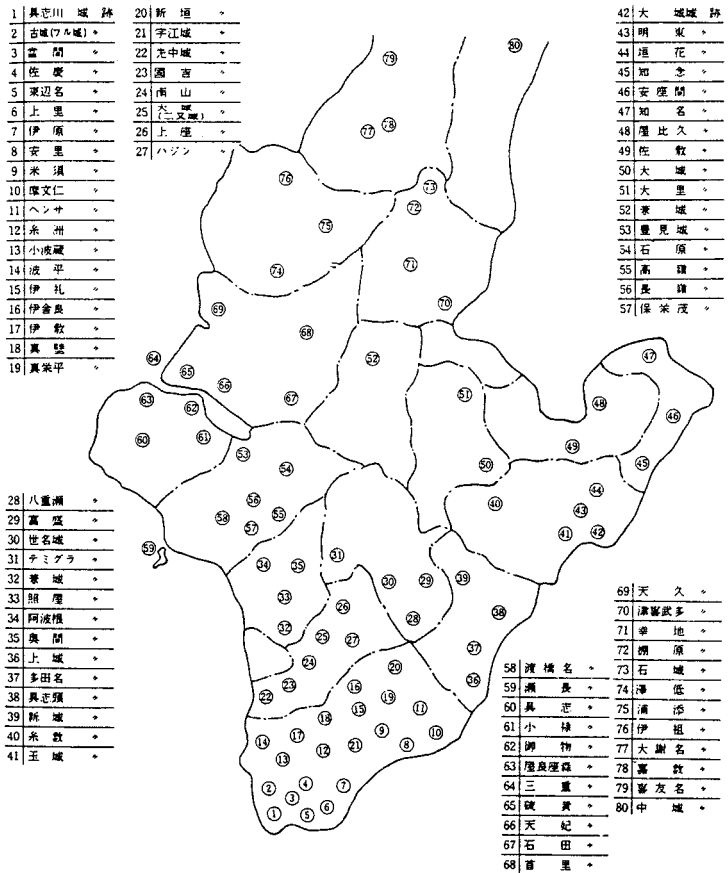


Fig. 5 「グシク」の分布（沖縄本島南部のみ）

Table 3 Scenario for "Gushku" development.

I. 既に九州南部との接触で文化的インパクトを受けていた縄文時代後期頃、原始の入々は高浜近くや防地のある台地に集落を形成し「家長」の下で小規模集団（マキヨ、クダ・フダ）が分布していた。集落の、波浪・台風からの防衛のため、近辺に豊富に分布する天然粗石を収集して、集落の一部または周囲に簡単な粗石乱積み石垣をめぐらしていた。

（沖縄編年貝塚時代～9c頃）

II. この期をうけた、後の王国時代への過渡期としてのグシク時代（90～13c?）に至ると、開作が行われ、鉄器がようやく使用されるようになった。農業生産も向上し、既存の集落間に集団化も進んだ。社会の組織化が進む過程でより権力のある者が生まれた（個人・首長）。権力者は、より適地に新しいより大きな集落の建設をするか、旧集落の適地への集合をはかった。その過程で従来の石垣に加えて歩道にも石を用いる技術も生れた、家屋の一部に石を材料として用いることも行われた。神への信仰、死者の霊への侍奉の念は組織化され、集落に住所・聖所・葬所の建設が進んだ。自然の脅威から自身を、また集落を守った「石」に対する保護の意識と一般生活空間との峻別の必要性は、これらの住所・聖所・葬所を石で囲むことおよび高所に建設することを自然なものとした。この慣習はその後もグシク時代を通じて行われ、その間石積みの技術も向上して来た。

（9c前後～ 按司出現の頃）

III. このように組織化された集団は、さらにその拡大、権力者の権威の高揚の要求により抗争をくりかえした。その暫定的収斂はより拡大した地域を支配する権力者（按司）の出現を生んだ。その分布は、耕地と人口の多い地域はより多くの権力者に、その逆の地域はより少ない権力者に分割・支配される状況を生んだ。按司たちは、その権威の象徴と民の支配、戦略の地理的有利性を考慮の上、従来の石垣の空間（住所など）の中から特定のものを選択し、より強固な、より規模の大きい城としての石造構造物の建設にとりくんだ。鉄器の使用もいよいよ盛んになり一部に金属工具による加工石の利用も行われた。

（按司出現の頃～13c頃）

IV. この按司たちの中には、12～13c頃までに海外の文物の移入の影響をうけて、より進んだ社会体制（王制）をもつものも現われた。他の按司もこれらの影響をうけ、抗争をくりかえしつつより大きな、より体制の整った集団にまとまり、結果として14cはじめ頃までに、沖縄本島は三つの勢力に分割され拮抗する時代（1326）を迎えた。各勢力はより強力な支配者を王とした（三山の成立）。王の城は、民を従役しさらに拡大、強固なものにされていった。

（13c～15c 中葉）

V. その後、各王は主として当時の巨大な大國・中國（明）や朝鮮との交流を深め、王の権威の証明と文物の移入につとめた。その過程で朝鮮の山城、中國の石造技術（石段、石橋）の見聞などから影響をうけ、それらの技術が従来の経験技術と融合し、王たちの城郭の拡大整備に当てて応用された。その頃まだ日本では土塁の城は築かれていたが石造の城の建設は本格化していなかった。

（15c中葉～18c 王朝終末）

VI. 三山の対立は中山王尚巴志が北山（1416）、南山（1429）を滅亡させるに及んで、その終焉を迎え、以後琉球王国として統一され、周辺地域も併合しつつ発展していった。過去に培われた石造技術は王国の安定期を迎えていよいよ開花し、建築技術とあいまって今日につながる15～16cに集まる南中城、石橋、寺院、城郭の補修などに大いに技術的応用がなされた。

（15c中葉～18c 王朝終末）

VII. 初期のアリ・タイプな石垣建設から発展したより高度に組織化された集落における石垣囲いの特定の空間を、いつしかその自然からの保護という概念と融合させつつグシクと呼ぶようになった。この概念は、石垣囲いの空間の規模に関係なく維持された。その結果その規模、現実の具体的機能とは特に関係なく、石垣囲いの空間の総体に同様の呼称が定着していった。中には、その位置や形態から明らかに従来のグシクのもつ一部の機能を与えるものについては、特に石垣囲いのない空間でも同様に呼ぶこともあった。かくしてバラエティーに富むグシク群が出現した。

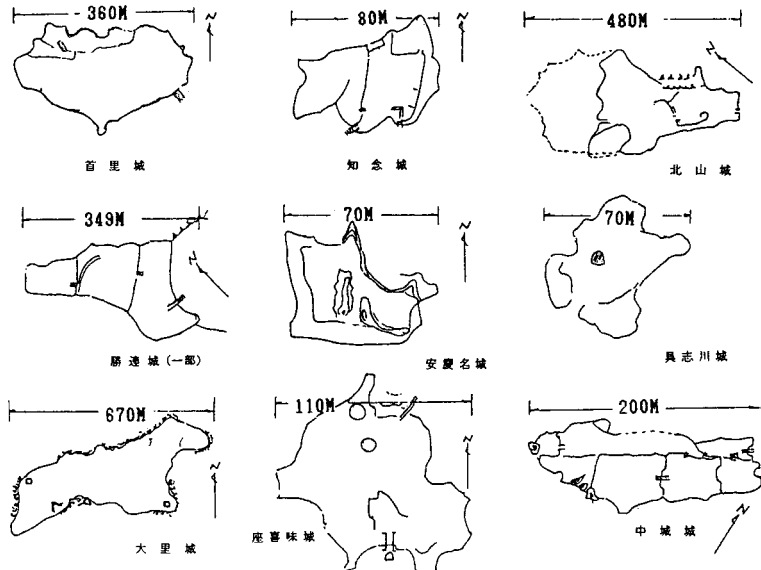


Fig.6 主なる「グシク」の平面形状

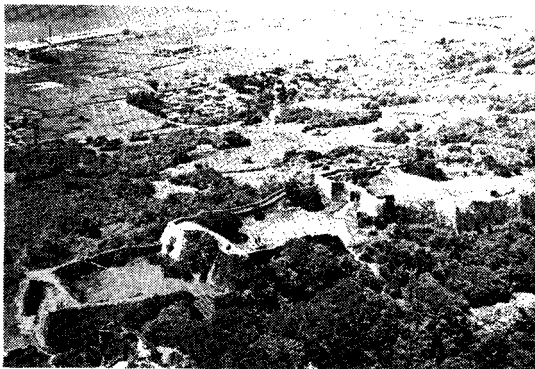
知られているグシクの中ではほぼ技術的に最高のレベルにあったと思われること、文献的にも比較的豊富なものがあることなどである。

海外の影響を検討する際、すべてに共通することであるが、影響を受けたと考えられる時期における、交流国との交流の実態と、国々の政治的・文化的状況の把握は重要である。これまで種々の指摘があるが、それらは視覚的、表層的類似性を断片的に指摘するにとどまっている場合がほとんどである。著者はこの状況、特に無批判な「フランス式築城法」の流布については、検討を要すると考え、考察している²¹⁾。その際、上記の交流国との政治的、文化的交流の状況、また交流国の同時期の状況も詳細に検討した (Fig.7 に中城城の城郭の状況および全体平面形状を示した)。

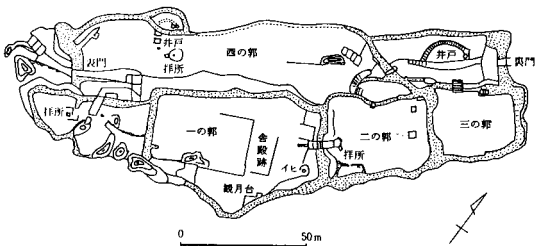
これらの検討を踏まえ、著者の中城城に関する海外影響の要約を示せば次のとおりである。

① 琉球王国の南方貿易盛期の頃の東南アジアの政治的文化的状況は、伝統的なインドの影響のもと、新興のイスラムの影響も台頭しつつあったが、直接的にヨーロッパの接触はきわめて希薄なものであり、貿易を介して琉球へ何らかのヨーロッパの影響をもたらすには困難があること。

② 約160年間の東南アジアとの接触のなかで、最も強大であったインド文化との関係が言及されないまま、中城城につき一足飛びに西方が言及されることは疑問が



(a) 城郭の状況 (部分・現在)



(b) 平面形状 (全)

Fig.7 中城城

残ること。

③ 大正年間来沖して、中城城につき「フランス式」の影響を指摘した藤津準一なる人物は、一貫して砲兵術に専門的にかかわりをもって退役しており、「築城法の権威」とするにはかなり難があり、その実蹟も見当たらなかった。したがってその発言は視角的印象の域を出ないと判断される。論証なく示された発言が、今日まで無批判に継承されていることは問題といわねばならない。

④ 東南アジアではなく、中国を介した西方の影響も考えられないことはないが、「中華思想」の強大な誇示のもと「朝貢貿易」によって関係をもった中国から西方の建設技術の導入の可能性は薄い。その頃までに「營造方式」²²⁾なる建設技術基準の確立していた中国であり、属国としての「朝貢国」に対して、自ら「西方」を導くとは考えがたい。

⑤ 規模の大きいグシクの石墨形状、また民家建築におけるヒンプンの形状などが、朝鮮におけるそれらとの類似性、城門、石橋、墳墓 (亀甲) における中国における場合との濃厚な形態の共通性、などから考えて、グシクの場合も、中国や朝鮮の影響を考えるのが自然である。彼我の、詳細な石造建造物の調査検討が今後課題となろう。

Fig.8 はグシク関連建造物を右側に、橋梁建設を左側に、年代順に示した年表である。全体としてグシク建設が先行し、その技術の蓄積が橋梁建設にも影響をもったであろうことがうかがえる。また、橋梁の場合、早い時期の築造物 (例: 天女橋、慈恩寺橋) がすでに高い技術レベルをもっていたこともうかがえる。

(3) 橋梁 (石造拱橋)

現存する古橋は、天女橋、放生橋、金城橋など数橋を数えるのみであるが、古橋の建設年については王朝府の記録 (Table 1, 第I期) によって比較的良好に知られている。それらの形状については、田辺泰²³⁾らの研究や、近年出版された往時の写真集^{24), 25)}、によって知ることができる。沖縄の古橋は一部を除いて他はすべてが拱橋である。

さて、石造拱橋についてはわが国で最も早い時期の導入が沖縄であったことは多くの研究者の指摘するところである (長崎眼鏡橋, 1634年, 沖縄の慈恩寺橋 1459年)。

さて、石橋建設がグシク建設における石工技術の影響が考えられることについては先にもふれたが、海外の影響としては中国が中心と考えられる。その理由は、グシク建設において城門の拱の建設が先行しており、これらは中国のそれと共通点があること、また駝背橋の形式が泉崎橋・天女橋などにしばしばみられるが、これは「營造方式」に示されたものほとんど同一形式であることなどである。その他にも橋柱に建設に関与した中国人の

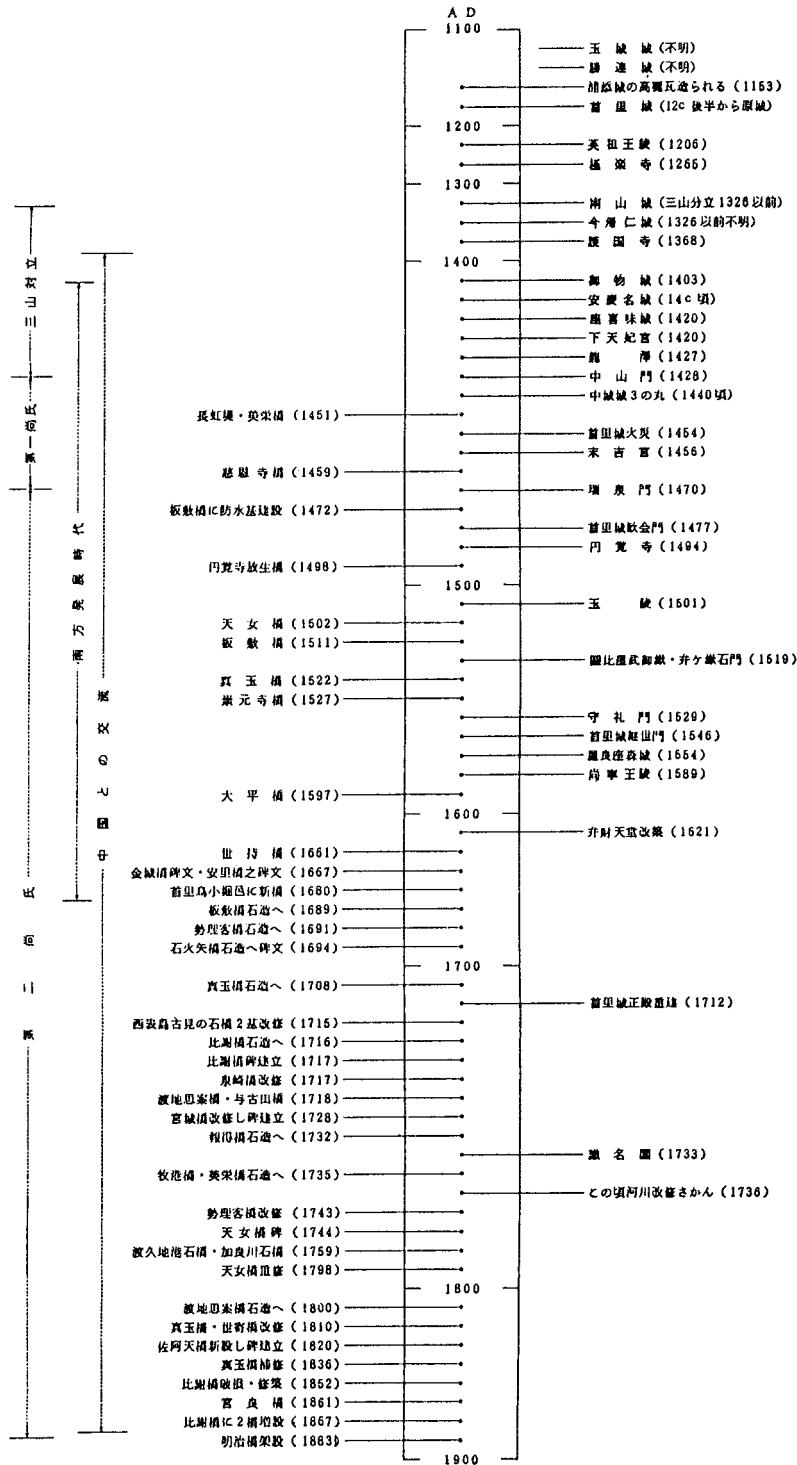


Fig.8 Development of "Gushiku" and old bridges.

名がみえること (放生橋) などもある。

沖繩の古橋について著者は、その建設史、構造(主構造、石積、欄干)につき検討しているが、それらの要約を示

せば次のとおりである。

① 1451年建造と伝えられる長虹堤が、「琉球国志略」(周煌、1756)に示される図のようにその開口部に石造

拱橋が築造されていたのであれば、これが琉球における石橋建設の初年と考えられる。しかし、海中堤という自然条件の厳しい環境下の築造であることを考慮するとき、これに至る先行の経験の存在が必要と思われ文字どおりこれが石橋の嚆矢とするには疑問なしとしない。

② 石橋の建設の盛期は、16世紀後半からの140年間に集中している。この期は、琉球王国の政体の基礎となり、文化面の発展の著しかった尚真王(1477~1562)のあとをうけ、慶長の役という一大破乱はあったものの後は安定した時代であった。

③ 技術面においては、世持橋(慈恩寺橋)、放生橋など初期に現われた橋梁にすでに、擬宝珠高欄や握蓮支柱、羽目彫刻など優れた技法があり、出現の頃からかなりのレベルにあったことが考えられる。したがって、橋梁建設に先立つ技術の存在が予想され、それらはグシクあるいは建築分野の技術であり、それらの橋梁への応用として展開されたのであろう。

④ 「営造方式」など中国の技術が琉球に伝えられたという、文献的証左はないが、橋梁のもつ形式における濃厚な類似性は、中国の影響が強いと想定でき、ポルトガルの影響など西方のインパクトを考えることは困難である。

⑤ 拱の部分の形状は、グシクなどの城門に用いられている拱の形状ときわめて類似性を有している。すなわち比較的長い側壁を有すること、扁平な湾曲石を輪石として用いることなどである。先行技術との関連性の存在を思わせる。

4. 結 語

わが国土木史における石造構造物に関して、沖縄のグシクおよび石造橋梁を中心とする築造物は、その早期の出現と相まって種々の特徴を有している。本稿はこれらにつき、海外の影響に焦点をあて論を試みたものである。考察に先立ち、沖縄文化全般における海外の影響状況を把握すべく、関連の分野につき調査を行い整理した。

石造構造物については、主要な対象であるグシクおよび石造橋を中心として考察した。前者については、従来種々の主張がなされたグシクの代表的存在である中城城を取り上げ、いわゆる「西方の影響」の想定が困難であり、中国、朝鮮の影響を考えるのが自然であることを示した。

後者については、先行技術としてのグシク建設技術の影響とより直接的な中国の影響が考えられることを示した(中国の影響の考えられる石造構造物としては、中国沿岸に倭寇警戒のための砦の石門とグシク石門との類似性、勾欄羽目彫刻の雲鶴文様、駝背形式の石造橋の形式、など、朝鮮の影響と思われるものに、民家・武家家屋に

みられる、正門奥の目かくし構造、いわゆる「ヒンプン」、その他山城を石囲いにすること²⁷⁾などがある)。しかしながら、先般(1982年10月)「沖縄文化の源流を考える」国際シンポジウム²⁶⁾などの開催にみるように、沖縄文化における海外の影響も含めた源流は今日いまだ重要な研究テーマである。石造構造物についても、今後追求されるべき課題は少なくない。

参 考 文 献

- 1) 仲松弥秀：古暦の村(沖縄民俗文化論)、沖縄タイムス社、pp.98~100, 1977.
- 2) 嵩元政秀：ヒニ城の調査報告書、文化財保護委員会、1966.
- 3) 友寄英一郎：再グシク考、沖縄考古学、第4号、1975.
- 4) 小川博三・上間 清：沖縄の城(1)、第30回土木学会全国大会講演概要集(第IV部)、1975.
- 5) 上間 清：沖縄の城(2)、第31回土木学会全国大会講演概要集(第IV部)、1976.
- 6) 上間 清：ARCH—その系譜と沖縄の石造橋、琉球大学工学部紀要、第14号、1977.
- 7) 上間 清：沖縄城・海外の影響、第36回土木学会全国大会講演概要集(第IV部)、1981.
- 8) 上間 清：沖縄の城と海外の影響、琉球大学工学部紀要、第24号、1982.
- 9) 又吉真三：建築、沖縄県史、第6巻(文化2)、沖縄県教育委員会、pp.517~665, 1975.
- 10) 小川博三：グシク—その都市原刻的考察、土木学会誌、Vol.60, No.6, pp.9~16, 1975.
- 11) 山口祐造：九州の石橋をたずねて(後篇)、昭和堂、pp.102~116, 1976.
- 12) 大田静六：眼鏡橋—西洋と日本の古橋、理工図書、pp.179~184, 1980.
- 13) 新里恵二・田港朝昭・金城正篤：沖縄県の歴史、山川出版社、p.67, 1972.
- 14) 上間 清：土木史における地方の地位、第7回土木計画学研究発表会「土木計画学研究・講演集」、1985.
- 15) 高良倉吉：沖縄古代史の論点、沖縄思潮、第7号、pp.5~21, 1975.
- 16) 只野文哉編：ソフトテクノロジー、丸善、pp.291~313.
- 17) 琉球政府文化課：歴史要覧(2)、1960.
- 18) 井上宗和：定本日本の城.
- 19) 大類伸監修：日本城郭全集(第15巻)、人物往来社、1968.
- 20) 川平朝申監修：沖縄—今と昔、月刊沖縄社、1965.
- 21) 上間 清：前出8).
- 22) 竹島卓一：営造方式の研究、巻1、中央公論社、1970.
- 23) 田辺 泰：琉球建築大観、琉球建築刊行会、1970.
- 24) 坂本万七：遺作写真集、新星図書出版、1982.
- 25) ハワイ大学・ロバート・K・境監修：望郷沖縄(全5巻)、本邦書籍株式会社、1981.
- 26) 沖縄県：沖縄文化の源流を考える、1983.
- 27) 朝鮮総督府：朝鮮古蹟調査報告—大正五年度朝鮮古蹟調査報告、国書刊行会、1974(復刊).

(1984.11.29・受付)